



■放鳥トキ候補の訓練が

始まりました

次回放鳥されるトキの候補18羽（オス8羽、メス10羽）が3月3日からトキ野生復帰ステーションで訓練を始めました。

トキたちはここで、飛ぶことやエサを探すなどの自然の中で生きていくために必要な能力を養います。昨年トキふれあいプラザで生まれた「みかん（No.287）」も放鳥候補の1羽として訓練しています。訓練中のトキの様子は、野生復帰ステーション観察棟からモニターを通してご覧いただけます。

次回放鳥は6月上旬に行われる予定です。

■ご寄付ありがとうございました

ございました

（株）米寅様（静岡県浜松市）、合同会社ひととき様（佐渡市）からご寄付をいただきました。

いただいたご芳志は、トキの野生復帰や生息環境の整備に使わせていただきます。ありがとうございました。

繁殖期のトキについて



サドッキー

6月頃までの繁殖期はトキが最も敏感になる季節です。人が巣に近づく、トキが巣を放棄してしまったり、一時的に巣から離れた隙にカラスなどの天敵に卵を奪われてしまう恐れがあります。

今年も無事にヒナが巣立つことを願って、営巣地への接近などは控えるようご協力をお願いします。

◆市役所産業観光部農業政策課

トキ保護係（トキ交流会館内）

☎ 24-6040

『漁師は、どんくを見て漁をする!』

今年1月に開催された「佐渡ジオパークガイド協会」の総会で、新潟大学の池田哲夫名誉教授の講演会が開催され、テーマは「渚から探る漁撈民俗」でした。

池田教授は、佐渡で使われている和船やたらい舟から見える地域の文化、佐渡式イカ釣具の国内分布から見てくる技術の伝播など、長年、佐渡の漁業を民俗学の見地から調査研究してこられた話題が多く、会員は興味深く聞き入っていました。

その中で、江戸時代、石見の漁師によってもたらされた漁法の1つ、スケソウダラの漁法はジオパークの視点から見ても関係性のある話です。スケソウダラは水温2〜5℃の海域に多く、水深200m付近で生息する深海魚です。このスケソウダラの漁場の1つである両津湾周辺は、水深200mの海底の範囲が狭く、ピンポイントで網を張ることが求められます。上手く張れなければ、漁が少ないだけでなく、海底の岩場に網を引っ掛けてしまうこともあります。

海面から海底地形をうかがうことはできないため、漁師たちは、地上

の地形から海底地形を想像して網を降ろしていました。目印となる山など2つの地点を定めて割り出す「山あて」と呼ばれる伝統的な方法で、スケソウダラの漁場を見極めていたそうです。

漁業は、海底地形だけではなく、地上の地形との関連性もあるようです。



両津郷土博物館に展示してあるスケソウダラの延縄漁の様子

◆市教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室

（畑野行政サービスセンター内）

☎ 66-4160



ケージに放されるトキ(写真提供:環境省)